

2025（令和 7）年度
札幌国際大学奨励研究費助成報告書

北広島市と札幌国際大学の連携を通じた
学生主導による学びの展開及び地域振興の探索
第 3 報

札幌国際大学スポーツ人間学部
スポーツビジネス学科¹⁾・スポーツ指導学科²⁾
横山克人¹⁾ 平澤芳明¹⁾ 安田純輝²⁾

目次

I. はじめに	1
I-1. 北広島市と札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部の包括連携協定締結	1
I-2. 北広島市総合計画（第6次）に示される北広島市の課題	3
I-3. 札幌国際大学が目指すアクティブラーニング	4
I-4. 北広島 Project の目的	4
I-5. 北広島 Project の短期目標と中長期目標	5
II. 北広島 Project の概要	6
II-1. 北広島 Project が目指すアクティブラーニングの視点に立った取り組み	6
II-2. 北広島 Project 2023（1年目）の取り組み	7
II-3. 北広島 Project 2024（2年目）の取り組み	9
III. 活動報告	11
III-1. 北広島 Project 2025（3年目）の活動趣旨	11
III-2. Fビレッジスポーツフェスティバル 2025	13
III-3. 第38回北広島ふれあい雪まつり	16
III-4. 北広島団地地域サポートセンター“ともに”主催「地域の運動会」	21
IV. まとめ	23
IV-1. 北広島 Project の再現可能性および汎用性の検証について	23
IV-2. 評価指標の高度化や長期的成果の追跡を通じた持続可能性について	23
IV-3. 発展的な産学官民連携の枠組みとして確立していく可能性について	24
V. 今後の展望	26
引用参考文献	27

図表一覧

図Ⅰ-1	主旨説明スライド①.....	1
図Ⅰ-2	主旨説明スライド②.....	2
図Ⅰ-3	主旨説明スライド③.....	2
図Ⅰ-4	ボールパーク構想による新たなまちづくり.....	3
図Ⅰ-5	札幌国際大学における「教育の基本的考え方」.....	4
図Ⅰ-6	北広島 Project における短期目標と中長期目標のイメージ.....	5
図Ⅱ-1	北広島 Project 2023 の初回 Kick off ミーティング.....	8
図Ⅱ-2	北広島 Project 2023 北広島市役所での報告会記念撮影.....	8
図Ⅱ-3	北広島 Project 2024 における北広島市との初回打ち合わせ.....	10
図Ⅱ-4	北広島 Project 2023 北広島市役所での報告会記念撮影.....	10
図Ⅲ-1	北広島 Project 2025 初回 Kick off ミーティングの様子①.....	12
図Ⅲ-2	北広島 Project 2025 初回 Kick off ミーティングの様子②.....	12
図Ⅲ-3	F ビレッジスポーツフェスティバル Supported by Natural Island ポスター ..	14
図Ⅲ-4	F.ビレッジスポーツフェスティバル 2025 におけるブース出展の様子①.....	14
図Ⅲ-5	F.ビレッジスポーツフェスティバル 2025 におけるブース出展の様子②.....	15
図Ⅲ-6	F.ビレッジスポーツフェスティバル 2025 での記念撮影.....	15
図Ⅲ-7	「第 38 回北広島ふれあい雪まつり」ポスター.....	16
図Ⅲ-8	「第 38 回北広島ふれあい雪まつり」企画内容や運営方法を整理した資料.....	18
図Ⅲ-9	「第 38 回北広島ふれあい雪まつり」Instagram 掲載写真.....	19
図Ⅲ-10	「第 38 回北広島ふれあい雪まつり」で使用した調査票.....	19
図Ⅲ-11	“ともに”「地域の運動会」当日朝の打ち合わせの様子.....	21
図Ⅲ-12	“ともに”「地域の運動会」Instagram 掲載写真.....	22
図Ⅲ-13	“ともに”「地域の運動会」ビンゴ大会の景品交換.....	22
図Ⅳ-1	北広島 Project 2025 北広島市役所での報告会の様子.....	25
図Ⅳ-2	北広島 Project 2025 北広島市役所での報告会記念撮影.....	25
表Ⅰ-1	包括的連携協定の具体的な事項.....	1

I. はじめに

I-1. 北広島市と札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部の包括連携協定締結

札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部と北広島市は、2023（令和5）年3月29日（木）に包括連携協定を締結した（北広島市，2023；札幌国際大学 HP，online）。本協定の目的は、包括的な連携のもと、相互の資源を活用した連携を強化することが目的である。連携事項の具体的な事項としては、下記の通りである（表 I-1）。

そこで、札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部は、スポーツ人間学部（スポーツビジネス学科およびスポーツ指導学科）を中心として、上記の目的達成を目指した「北広島 Project」2024（令和6年）年4月から始動した（図 I-1，図 I-2，図 I-3）。

表 I-1 包括的連携協定の具体的な事項

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 地域活性化に関すること。(2) 地域支援に関すること。(3) 地域人材の育成に関すること。(4) 産業・学術・文化の振興に関すること。(5) その他、目的を達成するために必要と認められる事項 |
|---|

（北広島市，2023；札幌国際大学 HP，online）



図 I-1 主旨説明スライド①

【連携事項】

1. 地域活性化に関すること。
2. 地域支援に関すること。
3. 地域人材の育成に関すること。
4. 産業・学術・文化の振興に関すること。
5. その他、目的を達成するために必要と認められる事項。

北広島Project

●学ぶ

地域に溶け込み、市についての理解を深める

●考える

課題解決など、市をより良くするためにできることを考案する

●実践する

市を実践のフィールドとして活用し、活動をする



図 I -2 主旨説明スライド②

北広島市は、居住、観光、ビジネスにおける交通利便性と豊かな自然の中で暮らしが共存するポテンシャルがある一方で、急速な少子高齢化、人口減少による活力低下や地区の分散、都市機能の不足、流出が課題として生じている。
このような諸課題の解決と地方都市の再生モデルとして、官民連携プロジェクトのボールパーク構想を打ち出し、同市の推進を図っている。

本学が有する人材（学生）の視点から、北広島市について文献調査および実地調査を行い、課題の抽出とその課題解決に向けたアクティブラーニングを展開する。
そのなかで、北広島市の活性化、支援事業、人材育成、産業・学術・文化の振興に関する一資料を得ることに加え、学生の汎用的な能力および課題解決能力の向上に繋げていくことを目的とする。

活動方針と目的

学生主体の課題解決型プロジェクト

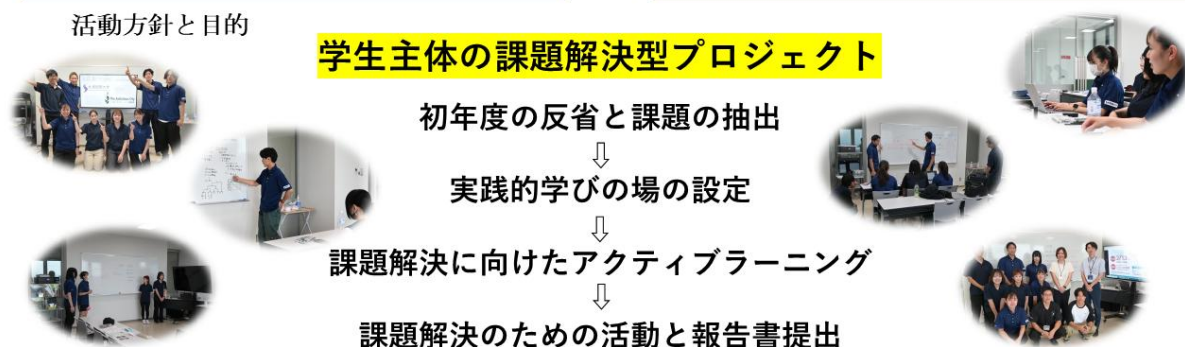


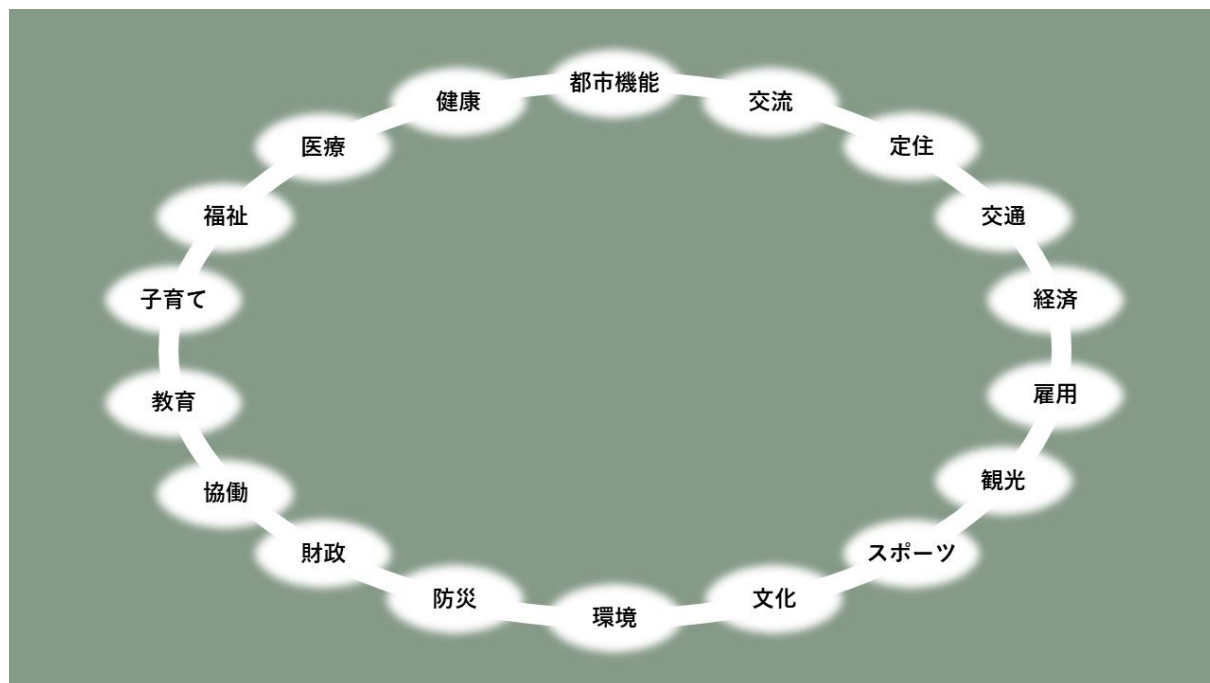
図 I -3 主旨説明スライド③

I-2. 北広島市総合計画（第6次）に示される北広島市の課題

北広島市は、居住、観光、ビジネスにおける交通利便性と豊かな自然の中での暮らしが共存するポテンシャルがある一方で、急速な少子高齢化、人口減少による活力低下や地区の分散と都市機能の不足、流出が現状課題として挙げている（北広島市，2021）。この諸課題の解決のため、官民連携プロジェクトとしてボールパークを整備することで、北広島市のアイデンティティを高め、居住者や企業立地を促進しながら、持続的な都市経営と社会課題の解決を図る地方都市の再生モデルの実現を目指している（北海道北広島市ボールパーク特設サイト）。所謂、ボールパーク構想である。

北広島市が掲げるボールパーク構想は、北海道のシンボルとして、新たな産業集積、起業促進、消費・雇用の拡大とコンパクトで健康な新たなライフスタイルを展開し、地域の持続的成長である。同市が目指す都市像（「希望都市」「交流都市」「成長都市」と北海道日本ハムファイターズの企業理念（Sports Community）が同じ方向であることを確認し、2016年6月から誘致を促進し始めた（北広島市，online）（図I-4）。

誘致活動に力を入れ始めた翌年、スポーツ庁は第2期スポーツ基本計画を示した。2017（平成29）年度から2020（令和2）年度の第2期スポーツ基本計画の4つの方針にスポーツで「人生が変わる」「社会を変える」「世界とつながる」「未来を創る」ことを示している（スポーツ庁，online）。そして、「スポーツイベントは経済効果を生み出すと共に、参加者や観戦者はそのまま交流人口となって地域の賑わいの創出を可能にすることから、地域活性化の起爆剤として期待されている」と報告されていることから、北広島市のボールパーク構想は、スポーツ庁の第2期スポーツ基本計画と合致していることがわかる。



（『北広島市総合計画（第6次）概要版』（北広島市，online）を基に筆者作成）

図I-4 ボールパーク構想による新たなまちづくり

I-3. 札幌国際大学が目指すアクティブラーニング

札幌国際大学（online1）は、「自由」「自省」「自立」のもと、自ら考え、自ら行動し、自省する人を教育理念に掲げている。豊かな国際性を身につけ、より深く地域に根差し、これからの時代を支えていくチカラを育む学びを大切にしている（図 I-5）。



自ら考え、自ら行動し、自省する人へ

本学には、いろいろな個性が集まっています。

だから、いろいろなことが学べます。

育てているのは「人と人をつなぐ人」。

豊かな国際性を身につけ、より深く地域に根差し、

これからの時代を支えていくチカラを育みます。

（「教育理念」（札幌国際大学 HP，online）より転載）

図 I-5 札幌国際大学における「教育の基本的考え方」

そのため、これまでも札幌市や清田区をはじめ、今金町、浦河町、ニセコ町など複数の行政と地域連携を深めるとともに学生の正課外の学びの場として活用していく共同プロジェクトを立ち上げ推進してきた。これらの地域連携共同プロジェクトは、本学の教育理念である「自ら…」学ぶ姿勢の醸成と、より深く地域に根ざす学びの場として最適な環境である。これは、『アクティブ・ラーニング研究 Vol.1』（日本アクティブ・ラーニング学会，2020）や『アクティブ・ラーニング研究 Vol.2』（日本アクティブ・ラーニング学会，2022）に掲載されている数多くの論文で報告されている。

また、「自ら…」学ぶ姿勢は、近年の教育界の言葉を用いると「主体的」や「能動的」と同義語として解釈することができる。『新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて：生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）』を一部抜粋すると、「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学習（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」（中央教育審議会，2012）と提言されている。

中央教育審議会（2012）が示す見解や日本アクティブ・ラーニング学会（2020，2022）が蓄積している知見からは、地域連携共同プロジェクトによる能動的学習（アクティブラーニング）は、学生の学びを深化させていく上で効果的な手法であり、高等教育機関における地域連携は学生の主体的な学習の場の創出に必要な事業であると言える。とりわけ、地方大学での括りである本学は、地域資源の豊富さと地域に根差した教育環境整備は極めて重要な課題である。

I-4. 北広島 Project の目的

本研究は、学生が能動的学習（アクティブラーニング）を展開する中で北広島市の活性化、支援事業、人材育成、産業・学術・文化の振興に関する一資料を得ることに加え、経年的に学生の汎用的な能力および課題解決能力の向上を検討することを目的とした。

I-5. 北広島 Project の短期目標と中長期目標

包括連携協定を締結することにより、北広島市の官民連携に加え、札幌国際大学が有する教育機関の知見や人材提供が可能となり、将来的には民間企業も交えた産学官民が共同するプロジェクトを展開することが目標である。中長期的に産学官民が共同するプロジェクトの展開を目標にする一方で、短期的には本学が有する知見と人材を提供し、北広島市が直面する諸課題について検討することが目標である。そして、これらの活動が産学官民プロジェクト展開の一助となることが将来的な目標である（図 I-6）。

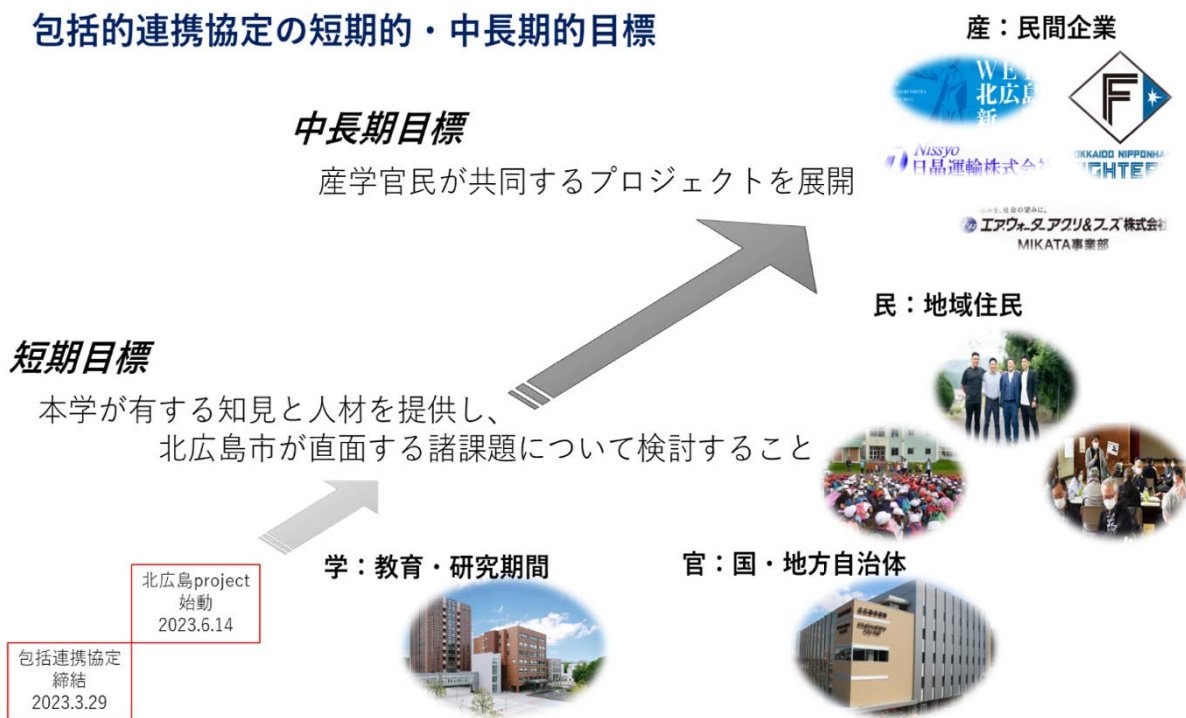


図 I-6 北広島 Project における短期目標と中長期目標のイメージ

2023 年度（初年度）北広島 Project（以下「北広島 Project 2023」と略す）は、本学が有する人材（学生）の視点から北広島市について文献調査および実地調査を行い、課題の抽出とその課題解決に向けた能動的学習（アクティブラーニング）に着目した（北広島 Project チーム，2024；横山ほか，2024）。

北広島 Project の 2 年目にあたる 2024 年度は、前年度の北広島 Project 2023 の取り組みから得られた学びやノウハウを生かしながら、初年度の反省と課題の整理に取り組んだ。その後、抽出された課題の解決方法について検討を進めるとともに、改めて北広島 Project メンバーとなる学生にとっての課題解決に向けたアクティブラーニングを実践するための学びの場と機会の創出に努めた活動を展開した（以下「北広島 Project 2024」と略す）。

そして、北広島 Project の 3 年目にあたる 2025 年度では、北広島 Project 2023 および北広島 Project 2024 で蓄積した経験やノウハウを更に活かした学生主体の活動を創出する取り組みをテーマとした。また、北広島 Project は、今年度の取り組みを以って 3 年目を迎えることから、経年的な成果検証と課題の提示を行う上で節目の年度になるといえる（以下「北広島 Project 2025」と略す）。

Ⅱ. 北広島 Project の概要

Ⅱ-1. 北広島 Project が目指すアクティブラーニングの視点に立った取り組み

「アクティブ・ラーニング」と「アクティブラーニング」は、中黒の有無によって区別される概念であり、前者は中央教育審議会（2012）を中心とする政策的文脈で用いられ、後者は教育改革における理論的・実践的キーワードとして用いられる点に特徴がある。まず、「アクティブ・ラーニング」は、従来の教員による一方向的な講義形式とは異なり、学修者の能動的な参加を取り入れた教授・学習法の総称とされる。そこでは、発見学習や問題解決学習、体験学習、調査学習などの多様な学習形態を通して、認知的・倫理的・社会的能力や教養、知識、経験を含む汎用的能力の育成が目指される。このような学びは、グループ・ディスカッションやディベート、グループ・ワーク等の協働的活動によって具体化され、学修者が主体的に関与することが求められる。そのため、「アクティブ・ラーニング」は教育課程内に位置づけられ、資質・能力を育成するための手段として整理される。

一方、「アクティブラーニング」は、溝上（2014）に代表されるように、受動的な知識伝達型学習からの脱却を目指す広義の概念であり、あらゆる能動的な学習を包含する枠組みである。ここでは、書く、話す、発表するといった活動への関与に加え、その過程で生じる認知プロセスの外化が重視される。認知プロセスとは、知覚、記憶、言語、思考といった情報処理過程を指し、特に思考には論理的思考、批判的思考、創造的思考、推論、判断、意思決定、問題解決などが含まれる。これらの過程を外化し、他者と共有・検討することで、学習者は自らの理解を再構成し、より深い学びへと到達することが可能となる。したがって、「アクティブラーニング」は単なる能力育成に留まらず、アウトプットを伴う実践的な学びとして、学校教育から社会への円滑な移行を支える学習観として位置づけられる。

両者の共通点は、講義中心の受動的学習からの転換を志向し、学習者の主体的関与を重視している点が挙げられる。一方で相違点として、「アクティブ・ラーニング」が教育課程内における汎用的能力の育成を目的とした手段であるのに対し、「アクティブラーニング」はそれに加えて認知プロセスの外化、すなわち学びの成果としてのアウトプットを重視する点にある。この違いは、前者が制度的・カリキュラム的枠組みに基づく概念であるのに対し、後者がより広く学習観や社会的接続を含意する概念であることを示している。

このような観点から、北広島 Project は、北広島市と札幌国際大学との包括連携のもと、学生が主体となって地域課題の発見と解決に取り組む実践である。学生は大学という枠を越えて地域を学びのフィールドとし、地域の資源や課題について調査・分析を行いながら、他者との対話や協働を通して理解を深めていく。その過程においては、「技能や態度の育成」に加えて、自らの思考や判断を言語化し表現する「認知プロセスの外化」が不可欠となる。また、地域住民や関係機関との関わりを通して、実社会における課題解決の複雑さや多様な価値観に触れることにより、学習内容が現実社会と接続される点にも意義がある。

北広島 Project は、知識の習得に留まらず、学習者が自ら問いを立て、試行錯誤を繰り返しながら解決策を構築していく過程を重視している。これは、主体的・対話的で深い学びの具体化であると同時に、学習成果を外化し社会へ発信するという点において、「アクティブラーニング」の理念と強く結びつく。したがって、北広島 Project における学生の学びは、教育改革のキーワードとしての「アクティブラーニング」の特性を色濃く反映したものであり、今後の高等教育の実践モデルとして重要な示唆を与えるものであるといえる。

II-2. 北広島 Project 2023（1年目）の取り組み

北広島 Project 1年目の活動は、学生が能動的学習（アクティブラーニング）を展開する過程において、北広島市の活性化や支援事業、人材育成、さらには産業・学術・文化の振興に資する資料および知見を獲得することに加え、学生の汎用的能力および課題解決能力の向上を実証的に検討することを目的として実施された（図II-1、図II-2）。特に本研究では、アクティブラーニングの教育的効果を多面的に捉えるために、「技能や態度の育成」と「認知プロセスの外化」という2つの観点进行分析枠組みとして設定した（横山ほか，2024）。この枠組みは、中央教育審議会（2012）が提示する能動的学修の概念および溝上（2014）の理論的知見に依拠している。

まず、「技能や態度の育成」に関しては、中央教育審議会（2012）が示す能動的学修を構成する要素、すなわち認知的能力、倫理的能力、社会的能力、教養、知識、経験の変容に着目し、質問紙調査を通じて量的に把握することとした。これにより、学生の内面的変化や能力形成の進展を客観的に捉えることを試みた。一方で、「認知プロセスの外化」については、学習者がどのように思考し、問題を認識・解決していくのかという過程に焦点を当て、対象学生および関係者に対するインタビュー調査を実施した。インタビュー対象は、質問紙調査において顕著な数値変容を示した学生を各学年から1名ずつ抽出し、半構造化インタビューを行うとともに逐語録を作成し、質的分析を行った。

実際の活動としては、定例ミーティングや企画発表、意見交換会、フィールドワーク、さらには地域との共同プロジェクトなど、多様な学習機会を通じて、北広島市の課題調査およびその解決に向けた実践的取り組みが展開された。これらの活動の中で、学生は地域の実情に即した課題を主体的に発見し、他者と協働しながら解決策を模索する経験を積むこととなった。とりわけ、北広島団地地域サポートセンター“ともに”において実施された「冬の運動会」共同プロジェクトは、地域の既存イベントに対して大学が人的資源および専門的知見を提供する形で成立したものであり、大学と地域社会の連携による具体的成果の一例として位置づけられる。また、同事業は地域施設を活用して実施されたことから、地域住民の参加促進や交流の活性化にも寄与したと考えられる。

調査結果に目を向けると、質問紙調査では、6項目中5項目（認知的能力、倫理的能力、社会的能力、教養、経験）において数値の向上が確認された。この結果は、学生が主体的に学習へ関与し、多様な活動を経験する中で、汎用的能力が着実に涵養されたことを示唆している。特に、社会的能力や経験の向上は、地域との協働活動を通じた実践的学習の効果を反映していると考えられる。また、インタビュー調査からは、学生が課題設定や意思決定の過程において自己の思考を言語化し、他者との対話を通じて認識を深化させていく様相が確認され、「認知プロセスの外化」が学習の質的向上に寄与する可能性が示された。

以上の結果から、本プロジェクトにおけるアクティブラーニングの実践は、北広島市の振興に資する具体的な成果を生み出し、学生の汎用的能力および課題解決能力の向上に有効に機能したことが示唆された。今後は、これらの成果を持続的な地域連携の枠組みへと発展させ、長期的な学習成果の検証や評価手法の精緻化を図ることが求められる。



図Ⅱ-1 北広島 Project 2023 の初回 Kick off ミーティング



図Ⅱ-2 北広島 Project 2023 北広島市役所での報告会記念撮影

Ⅱ-3. 北広島 Project 2024（2年目）の取り組み

北広島 Project 2年目の活動は、学生が能動的学習（アクティブラーニング）を展開する中で、北広島市の活性化や支援事業、人材育成、産業・学術・文化の振興に関する資料および知見の獲得に加え、経年的観点から学生の汎用的能力および課題解決能力の向上を検討することを目的として実施された（図Ⅱ-3、図Ⅱ-4）。特に2年目においては、初年度の成果を踏まえ、活動の継続性と発展性に着目し、学生の学びの質的変容を明らかにすることを重視した（横山ほか，2025）。

地域貢献活動としては、「地域の運動会」への継続的参画に加え、新たにブース出展やロコモティブシンドローム予防を目的としたロコモテストの実施など、活動内容の拡充が図られた。これにより、年間を通じて多様な実践機会が確保され、学生は地域住民との関わりを深めながら、より実践的かつ主体的なアクティブラーニングを展開することが可能となった。これらの取り組みは、地域課題への理解を深化させるとともに、大学が有する知見や人的資源を地域へ還元する具体的な形として機能したといえる。

一方、学生の汎用的能力および課題解決能力の経年的変容については、質問紙調査およびインタビュー調査の結果をもとに検討した。質問紙調査では、継続メンバーの回答内容に変化が認められた。北広島 Project 2023 の段階では、活動に対する期待として「北広島市について知ること」「市民との関わりを持つこと」「地域施設を訪問すること」など、比較的受動的かつ探索的な関心を中心であった。また、挑戦内容としても「会議資料の作成」「イベントの企画」「プレゼンテーション」など、プロジェクト内部で完結する活動に関する記述が多く見受けられた。これらは、プロジェクトへの参加初期段階において、活動の進め方や学習方法を模索する内向的な傾向を示していると解釈できる。

これに対し、北広島 Project 2024 では、学生の記述内容が地域や他者との関係に言及する外交的なものへと変化していることが確認された。すなわち、活動の目的や意義を地域社会との関わりの中で捉え、主体的に役割を果たそうとする姿勢の強まりが示唆された。このような変化は、継続的な実践経験の蓄積を通じて、学生の学びが単なる技能習得にとどまらず、社会的文脈の中で再構築されていることを意味する。さらに、インタビュー調査において、北広島市役所職員から「当初はやらされている印象もあったが、次第に学生が主体となって動く姿が見られるようになった」との指摘が得られた。この発言は、第三者の視点からも学生の行動様式の変化が認識されていることを示しており、プロジェクトの継続が学生の主体性や課題解決能力の向上に寄与している可能性を裏付けるものである。

以上の成果を踏まえると、包括連携協定締結後2年目の活動により、北広島市における官民連携に加え、大学の教育的資源を活用した人材育成および地域支援のモデルが一定程度構築されたと評価できる。また、新規イベントの企画・実施へと発展した点は、プロジェクトの発展段階への移行を示す重要な指標である。今後は、この取り組みを基盤として、共同プロジェクトや定期開催型イベントの体系化を図るとともに、関係主体間の連携の質をさらに高めていく必要がある。最終的には、民間企業も含めた産学官民の協働による持続的かつ発展的なプロジェクトへと展開していくことが期待される。



Ⅱ-1 北広島 Project 2024 における北広島市との初回打ち合わせ



図Ⅱ-2 北広島 Project 2024 北広島市役所での報告会記念撮影

Ⅲ. 活動報告

Ⅲ-1. 北広島 Project 2025（3年目）の活動趣旨

本プロジェクト3年目の活動は、これまでの実践の蓄積を踏まえ、学生による能動的学習（アクティブラーニング）の高度化と体系化を図るとともに、北広島市における地域課題解決への実効的な貢献を一層推進することを目的として展開する。特に本年度は、従来の活動の継続と発展に加え、産学官民の多主体連携の強化および学習成果の社会還元の仕組み化に重点を置いた（図Ⅲ-1、図Ⅲ-2）。

具体的な地域貢献活動としては、「地域の運動会」や健康増進事業への継続的参画に加え、新たに民間企業や地域団体との連携による企画を導入し、活動の多様化と実践領域の拡張を企画していく。また、学生が主体となって企画・運営を担う割合を高めることで、より自律的かつ責任ある学習環境の構築を試みていく。

さらに本年度は、活動の体系化を図る観点から、プロジェクト内における役割分担の明確化や、企画立案から実施、評価に至る一連のプロセスのモデル化を進めていくこととした。これにより、学生は単発的な経験にとどまらず、課題発見・計画立案・実践・振り返りという循環的な学習プロセスを意識的に遂行することが可能になるといえる。このような構造化は、アクティブラーニングにおける「認知プロセスの外化」を一層促進し、学習内容の内在化と汎用的能力の深化に寄与するものと考えられる。

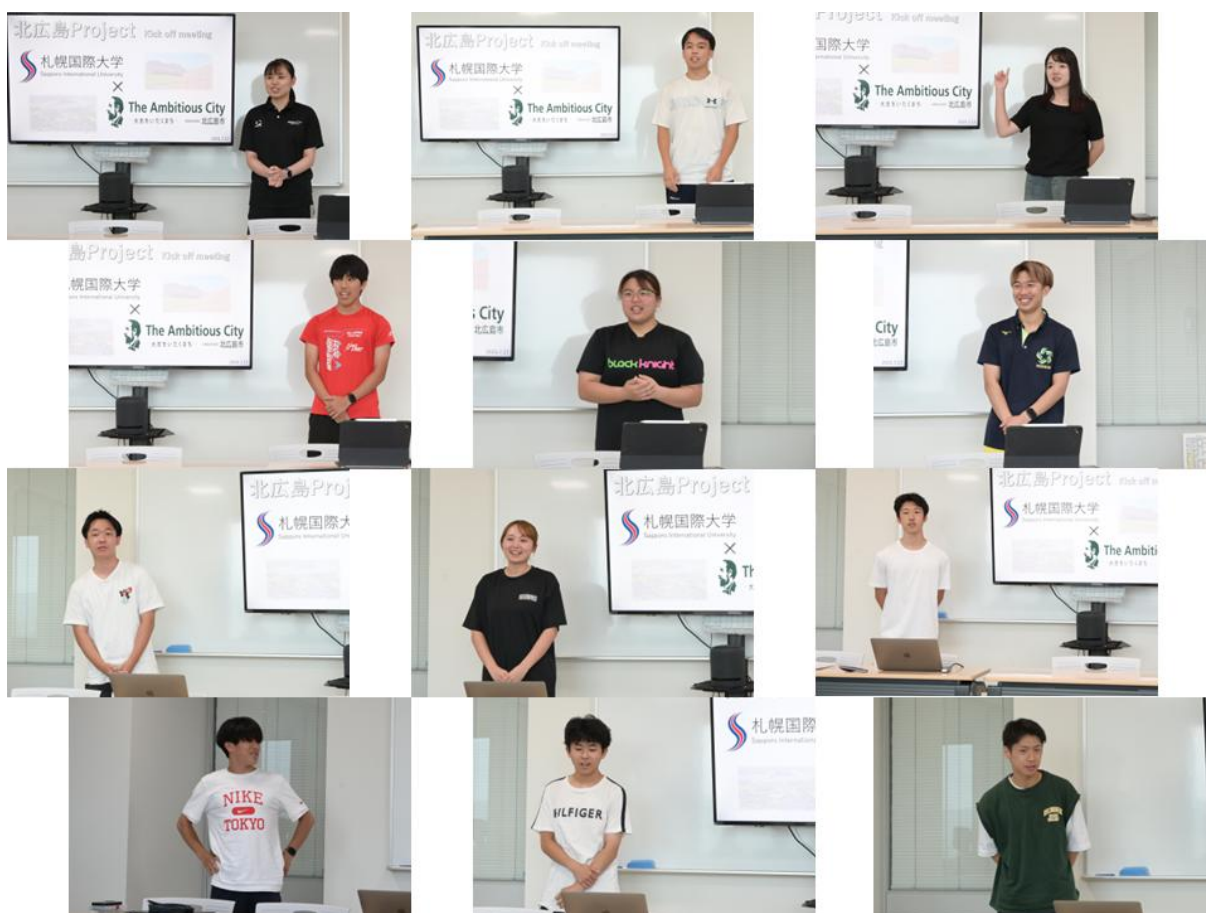
学生の汎用的能力および課題解決能力の変容については、質問紙調査およびインタビュー調査を通じて検討してきた（横山ほか，2024，2025）。質問紙調査では、継続参加学生において、これまで向上が確認されてきた認知的能力、社会的能力、経験に加え、自己調整的な学習態度やリーダーシップに関する項目においても顕著な伸長が認められた（横山ほか，2024）。これは、活動の長期化と役割の高度化に伴い、学生がより主体的に学習をマネジメントする段階へ移行していることを示唆している。

また、インタビュー調査からは、学生が地域社会の一員としての自覚を持ち、活動の意義を自らの言葉で説明できるようになっている様相が確認された。加えて、関係者からは「学生が企画段階から主体的に関与し、地域のニーズを踏まえた提案ができるようになった」との評価が得られた。このような第三者評価は、プロジェクトの継続的実施が学生の実践力および社会的責任意識の形成に寄与していることを裏付けるものである（横山ほか，2025）。

以上の結果から、北広島 Project は、過去2年間の活動実績を振り返って教育実践としての深化に留まらず、地域連携モデルとしての成熟段階へ移行しつつあると評価できた。すなわち、学生の学びが個人的能力の向上に留まらず、地域社会への具体的貢献として可視化される段階に到達したといえる。そこで、北広島 Project 3年目の取り組みとしては、本モデルの再現可能性および汎用性を検証するとともに、評価指標の高度化や長期的成果の追跡を通じて、持続的かつ発展的な産学官民連携の枠組みとして確立していくことを目指していく取り組みが求められる。



図Ⅲ-1 北広島 Project 2025 初回 Kick off ミーティングの様子①



図Ⅲ-2 北広島 Project 2025 初回 Kick off ミーティングの様子②

Ⅲ-3. F.ビレッジスポーツフェスティバル 2025

北広島 Project2025 は、2025 年 9 月 27 日（土）にエスコンフィールド HOKKAIDO で開催された「F ビレッジ スポーツフェスティバル Supported by Natural Island」（北海道日本ハムファイターズ HP, 2025）にてブースを出展した（図Ⅲ-3）。

出展にあたり、8 月 19 日（火）および 8 月 25 日（月）に学生間で実施種目に関する協議を行った。協議では、前年度の実施内容や参加者からの反応を踏まえ、継続実施すべき種目と新規導入種目について検討した。

継続実施すべき種目においては、前回の評価を参考に「手軽に参加できる」握力測定および背筋力測定を継続実施することを確認した。これらの種目は、簡易性と測定結果の分かりやすさから幅広い年代の参加者に受け入れられており、継続的な実施によって経年的なデータ収集にも寄与している。

一方で、新規導入種目については、参加者層の拡大や子どもの興味、関心を高める工夫が課題として挙げられていたことから、新たな取り組みとしてディスクッターナインおよび反応トレーニングを導入することとした。これにより、楽しみながら身体機能に関するデータを取得できる環境整備を図った。

既存メンバーの提案により、イベント運営の円滑化を目的として、9 月 25 日（木）および 9 月 26 日（金）の 2 日間にわたり、本学第 2 体育館において事前リハーサルを実施した。リハーサルでは、実際のブース面積を想定した配置計画を行い、各測定種目の動線や安全面について確認した。特にディスクッターナインでは、限られたスペース内で安全かつ効果的に実施できるよう、的の設置位置や投球位置を調整した。また、反応トレーニングについても、参加者の年齢や身体特性を考慮したバーの設置基準を策定するなど、実施方法の改善を図った。

9 月 27 日（土）当日は、午前 8 時より各ブース担当者による最終確認を行い、その後、物品搬入および設営作業を実施した。午前 9 時 30 分のイベント開始後は時間の経過とともに参加者数が増加し、記入用紙が不足するほど多数の来場者に参加があった（図Ⅲ-4, 図Ⅲ-5, 図Ⅲ-6）。特に、従来から実施している筋力測定種目に加え、新規導入したディスクッターナインや反応トレーニングについても多くの参加が見られ、参加者の興味関心を喚起する取り組みとして一定の成果を得ることができた。

一方で、参加者数の増加に伴い、記録用紙や運営体制の準備不足が課題として明らかとなった。今後は、参加人数の増加を想定した物品準備や運営動線のさらなる改善を行うとともに、継続的なデータ収集と種目内容の検証を通じて、地域住民の健康・体力づくりに資する取り組みへ発展させていく必要がある。



9/27 SAT • 28 SUN
 9:30～17:00 9:30～15:00 **会場** エスコンフィールドHOKKAIDO

(北海道日本ハムファイターズ HP, 2025 より転載)

図Ⅲ-3 Fビレッジスポーツフェスティバル Supported by Natural Island ポスター



図Ⅲ-4 F.ビレッジスポーツフェスティバル 2025 におけるブース出展の様子①



図Ⅲ-5 F.ビレッジスポーツフェスティバル 2025 におけるブース出展の様子②



図Ⅲ-6 F.ビレッジスポーツフェスティバル 2025 での記念撮影

Ⅲ-4. 第 38 回北広島ふれあい雪まつり

2025 年 8 月 8 日（金）、北広島市役所における打ち合わせに参加し、「第 38 回北広島ふれあい雪まつり」（きたひろ農学校 HP，2026）について説明を受けた。本イベントは、北海道北広島市において毎年冬季に開催される市民参加型の地域イベントであり、地域住民間の交流促進および冬季における屋外活動機会の創出を目的としている（図Ⅲ-7）。



（きたひろ農学校 HP，2026 より転載）

図Ⅲ-7 「第 38 回北広島ふれあい雪まつり」 ポスター

北広島 Project 2025 では、これまで屋外型イベントへの参加実績が少なく、冬季地域イベントへの参画は新たな挑戦として位置づけられた。そのため、10月14日（火）には、北広島市役所職員との協議を行い、イベント参加に向けた具体的な調整を進めた。その結果、10月22日（水）に開催された実行委員会において正式に参加が決定した。

学生間で企画立案に関する協議を行った。これまでの地域イベントにおける成果と課題を踏まえ、子どもと保護者がともに参加しやすい内容を重視した。継続種目として、前回の「F. VILLAGE スポーツフェスティバル」において好評を得た反応トレーニングおよびディスゲッターナインを採用した。これらは、年齢を問わず参加しやすく、楽しみながら身体機能に関するデータ収集を行える点において継続的な成果が認められている。

一方で、新規性や多様性の向上が課題として挙げられていたことから、新種目として牛乳パックタワーおよびカップスタックを導入した。特にカップスタックについては、巧緻性や集中力を要する活動として、従来種目との差別化を図った。

準備段階では、既存メンバーの提案により、対面およびオンラインを併用したミーティングを複数回実施し、企画内容や役割分担について検討を試みたが、例年より参加学生数が多かったことから、日程調整や情報共有に困難が見られた。その対応として、企画内容や運営方法を整理した資料（図Ⅲ-8）を作成し、全参加者が共通認識を持てる体制整備を図った。さらに、リハーサルでは牛乳パックの加工やカップスタックの実技練習を行い、安全性および運営効率の向上に努めた。

2026年1月31日（土）には、「第38回北広島ふれあい雪まつり」1日目が開催された。当日は学校集合組と現地集合組に分かれて準備を行い、道具設営後に簡易シミュレーションした上で、11時よりブース運営を開始した。午前中は悪天候および地域小・中学校の土曜参観の影響もあり来場者数は限定的であったが、午後以降は来場者が増加した。特に、継続実施している反応トレーニングおよびディスゲッターナインは、開始直後から高い参加率を示し、幅広い年代に受け入れられていた。反応トレーニングでは、参加者が笑顔で挑戦する様子が多く見られ、楽しみながら身体活動を促進する種目となっていた。

一方、カップスタックについては一定の技術を要するため、幼児年代には難易度が高い場面も見られた。その結果、参加者が他種目へ集中する傾向が認められ、対象年齢に応じたルール調整や補助方法の工夫が課題として明らかとなった。牛乳パックタワーについては、保護者と子どもが協力しながら参加する場面が多く見られ、世代間交流を促進する活動として一定の成果を得た。

2026年2月1日（日）には、同イベント2日目が開催された。午前9時より会場準備を開始し、10時からブース運営を行った。開始直後は来場者数が少なかったものの、昼頃から終了時にかけて参加者が増加した。特にディスゲッターナインは、子どもから成人まで幅広い層に人気があり、2日間合計で約120名の参加があった。年齢や身体能力に応じて投球距離を調整することで、小さな子どもでも参加しやすい環境を整備し、笑顔で活動する様子が多く見られた。また、記録向上を目指して繰り返し挑戦する参加者も見られ、運動への意欲喚起につながる実践となった。

2日目の工夫としては、カップスタックやディスゲッターナインを複数配置したことである。その結果、家族同士で競い合う場面も見られ、交流促進という地域イベントの目的にも寄与した。

一方で、牛乳パックタワーでは、終了間際に一部児童がルールを守らない行動を取る場面が見られ、安全管理およびルール周知の必要性が課題として挙げられた。今後は、ルール掲示や参加前説明を充実させ、安心して参加できる運営体制を整備する必要がある。また、受付を経由せず参加する来場者も複数確認されたため、調査票配布や導線設計についても改善の余地が認められた。

本イベントでは、13名の学生が協力して運営したが、複数人で参加者対応を行うことで、単独対応時よりも参加者とのコミュニケーションが活発化し、より楽しんでいる様子が確認された（図Ⅲ-9、図Ⅲ-10）。これらの経験を通じて、地域イベント運営における学生間連携の重要性や、対象年齢に応じたプログラム設計、安全管理、受付体制整備等の課題が明確となった。今後は、これまで蓄積してきた地域連携活動の成果を活かしながら、継続的な運営改善と地域住民の健康・交流促進に資する取り組みへ発展させていく必要がある。



図Ⅲ-8 「第38回北広島ふれあい雪まつり」企画内容や運営方法を整理した資料



図Ⅲ-9 「第 38 回北広島ふれあい雪まつり」Instagram 掲載写真

反応トレーニング・ディスゲッターナイン 計測結果 集計表

本日は、札幌国際大学のブースにお越しいただき、ありがとうございました！
アンケート＆集計表へのご回答につきまして、ご協力をお願いします。

Q1 本日はどちらからお越しですか。(○をつける)

Q2 あなたの性別を教えてください。(○をつける)

Q3 あなたの年齢を教えてください。

Q4 あなたは、スポーツ経験をお持ちですか。(○をつける)

経験しているスポーツの「名称」を教えてください。

経験しているスポーツ種目の「継続年数」を教えてください。

Q5 運動の頻度を教えてください。(○をつける)

Q6 反応トレーニングは、何本キャッチできましたか？

Q7 ディスゲッターナインでは、ボールが何個入りましたか？

札幌国際大学
札幌国際大学短期大学部・大学院

アンケート＆集計表へのご回答、ありがとうございました！

図Ⅲ-10 「第 38 回北広島ふれあい雪まつり」で使用した調査票

Ⅲ-5. 北広島団地地域サポートセンター“ともに”主催「地域の運動会」

北広島団地地域サポートセンター“ともに”で開催された「地域の運動会」は、北広島 Project 初年次から参画している事業である。本イベントは、地域住民間の交流促進と多世代参加型の身体活動機会の創出を目的として継続的に実施されているものであり、本年度も学生主体による企画立案と運営実践を通して地域連携活動を推進した。

北広島 Project 2025 は、過去の活動成果を踏まえつつ、新たな企画要素を取り入れることを目的として、学生間で複数回の検討を行った。その結果、実施内容として「つなぎ企画」「大人数参加型ゲーム」「ビンゴ大会」の3本柱を設定した。

つなぎ企画では、北広島 Project 2025 の他地域イベントにおいて好評を得てきたカップスタックおよびディスクッターナインを継続実施することとした。これらの種目は、短時間で気軽に参加できる点や、子どもから高齢者まで幅広い年代が楽しめる点において継続的な成果が認められている。

一方、大人数参加型ゲームについては、従来よりも参加者同士の交流を重視した内容を目指し、学生間で意見交換を行った。その結果、「9マス鬼ごっこ」「お絵かき伝言ゲーム」「文字ならべ」「連想ゲーム」「ハーフパイプ」の5案が提案された。特に「9マス鬼ごっこ」は、9つのマスを用いて鬼と同じマスに入らないよう移動するゲームであり、瞬時の判断力やコミュニケーションを必要とする活動として考案された。また、「お絵かき伝言ゲーム」はホワイトボードを用いて絵を伝達していく内容であり、世代を問わず楽しめるコミュニケーション型ゲームとして企画された。「文字ならべ」は昨年度から継続実施したものであり、50音カードを用いてお題に沿った言葉を作成する活動として定着している。

そして、ビンゴ大会については、例年参加者満足度が高い企画であることから本年度も継続実施とした。アイスブレイク要素を加味し、ビンゴカード裏面の数字を利用したグループ分けも取り入れた。

2026年1月16日（金）には、“ともに”において事前会議を実施した。会議には、北広島団地地域交流ホームふれての小野崎ひとみ氏、“ともに”施設長の向山篤氏、地域運動会代表の藤野伸之氏をはじめとする市民スタッフ、本学教員2名および学生4名が参加した。会議では、学生が各競技案の説明を行い、「9マス鬼ごっこ」の実演も実施した。実際のデモンストレーションを通じて、安全性や運営方法、参加しやすさについて意見交換を行った結果、最終的に「9マス鬼ごっこ」「お絵かき伝言ゲーム」「文字ならべ」「ハーフパイプ」を正式種目として採用することが決定した。

その後も学生間でミーティングを重ね、各種目のルール、使用物品、進行方法、景品内容等について具体的な検討を行った。特に、幅広い年代が参加する地域イベントであることを踏まえ、ルールの簡略化や安全面への配慮を重視した。2026年2月13日（金）には、翌日の本番に向けた現地リハーサルを実施した。現地リハーサルでは、北広島団地地域交流ホームふれて職員とともに、学生が実際にデモンストレーションを行いながら、「9マス鬼ごっこ」のコート配置や、「ハーフパイプリレー」「文字ならべ」の時間配分等を確認した。これにより、当日の運営動線や進行上の課題を事前に共有し、円滑なイベント実施に向けた調整を行った。

2026年2月14日（土）、“ともに”において「地域の運動会 2025」が開催された。当日は、学生を含む約75名のスタッフが参加し、開始前ミーティングにおいて安全面への配

慮や役割確認を行った。開会後にはラジオ体操を実施し、学生も地域スタッフとともにステージへ上がり、参加者と交流しながら会場全体の雰囲気づくりに貢献した。イベント前半は、地域運動会が企画した玉入れやハイハイリレー、パン食い競争等の既存プログラムが実施され、学生は競技補助および参加者対応を行った。昼休み時間には、つなぎ企画としてディスクッターナインおよびカップスタックを実施した。これらは子どもだけでなく地域スタッフや高齢者にも好評であり、短時間でも気軽に参加できる交流型企画として有効性が確認された。午後からは、本学学生が中心となって企画した種目を実施した。特に新規企画である「9 マス鬼ごっこ」は参加者から高い評価を得ており、高齢者からも「とても楽しかった」「次回も参加したい」といった感想が聞かれるなど、多世代交流を促進する種目として成果が認められた。また、「お絵かき伝言ゲーム」についても、世代を超えたコミュニケーションが自然に生まれる場面が多く見られ、交流型レクリエーションとして一定の効果が確認された（図Ⅲ-11、図Ⅲ-12、図Ⅲ-13）。

一方で、本年度は昨年度と比較して子どもの参加人数が少ない傾向が見られた。そのため、今後は広報方法や対象世代に応じた企画内容の工夫が課題として挙げられる。また、種目によって参加者数に偏りが見られたことから、難易度設定や進行方法について継続的な検証が必要である。

以上のように、本活動では、これまでに蓄積してきた地域連携活動の成果を継承しながら、新規企画を導入することで、多世代交流および地域住民の身体活動促進に寄与することができた。また、学生にとっても、企画立案、地域住民との協働、運営実践を通して、実践的なコミュニケーション能力や地域連携能力を養う機会となった。今後は、参加者層の拡大や運営体制のさらなる改善を図りながら、継続的な地域貢献活動へ発展させていく必要がある。



図Ⅲ-11 “ともに”「地域の運動会」当日朝の打ち合わせの様子

札幌国際大学 スポーツ人間学部 北広島 Project



北広島団地 地域サポートセンター とともに 「地域の運動会」

図Ⅲ-12 “ともに”「地域の運動会」Instagram 掲載写真



図Ⅲ-13 “ともに”「地域の運動会」ビンゴ大会の景品交換

VI. まとめ

北広島 Project 3 年目の取り組みとしては、本モデルの再現可能性および汎用性を検証するとともに、評価指標の高度化や長期的成果の追跡を通じて、持続的かつ発展的な産学官民連携の枠組みとして確立していくことを目指していく取り組みが求められる。

VI-1. 北広島 Project の再現可能性および汎用性の検証について

北広島 Project は、学生が主体となり、行政機関、地域団体、地域住民と協働しながら、多世代交流型のスポーツ・レクリエーション活動を企画・運営する実践モデルとして展開している。実施内容は、特別な設備や高度な専門機器を必要とせず、比較的簡易な道具と人的資源によって構成されている点に特徴がある。そのため、地域体育館や交流施設、学校施設等が確保できれば、他地域においても導入可能であり、一定の再現可能性を有していると考えられる。また、実施種目についても、イベントの特徴、参加者の対象年齢や地域特性に応じて柔軟に変更・調整できる構成となっている。このことから、子ども、高齢者、親子世代など、地域ごとの参加対象に合わせた応用が可能であり、汎用性の高い地域交流モデルとして展開できる可能性が示唆された。さらに、本活動では、事前打ち合わせ、リハーサル、振り返りを継続的に実施しており、運営ノウハウの蓄積が進められている。こうしたプロセスをマニュアル化・体系化することで、他地域や他大学への展開も期待できる。

VI-2. 評価指標の高度化や長期的成果の追跡を通じた持続可能性について

北広島 Project では、イベント参加人数や参加者の反応、継続参加の様子などから一定の成果が確認された。一方で、現段階では主に短期的かつ定性的な評価が中心であり、事業効果を客観的・継続的に把握するためには、評価指標の高度化が課題である。

例えば、参加者満足度調査に加え、年代別参加率、リピート参加率、交流頻度の変化、身体活動への意識変容などを指標化することが挙げられる。また、地域住民同士の関係性形成や孤立予防、健康意識の向上といった中長期的効果についても継続的な追跡調査を行うことで、地域貢献活動としての実効性をより明確に示すことが可能であると考えられる。さらに、学生側においても、企画力、コミュニケーション能力、地域連携力などの教育的成果を可視化することが重要である。これにより、地域貢献のみならず、大学教育としての学習成果も評価可能となり、継続的な事業実施の意義を高めることにつながる。

持続可能性の観点では、地域住民、行政、大学、地域団体が役割を分担しながら継続的に関与できる体制整備が不可欠である。特定の個人や年度ごとの学生に依存しない運営体制および組織体制を構築することで、継続的な地域活動として定着していく可能性が高まることが考えられる。

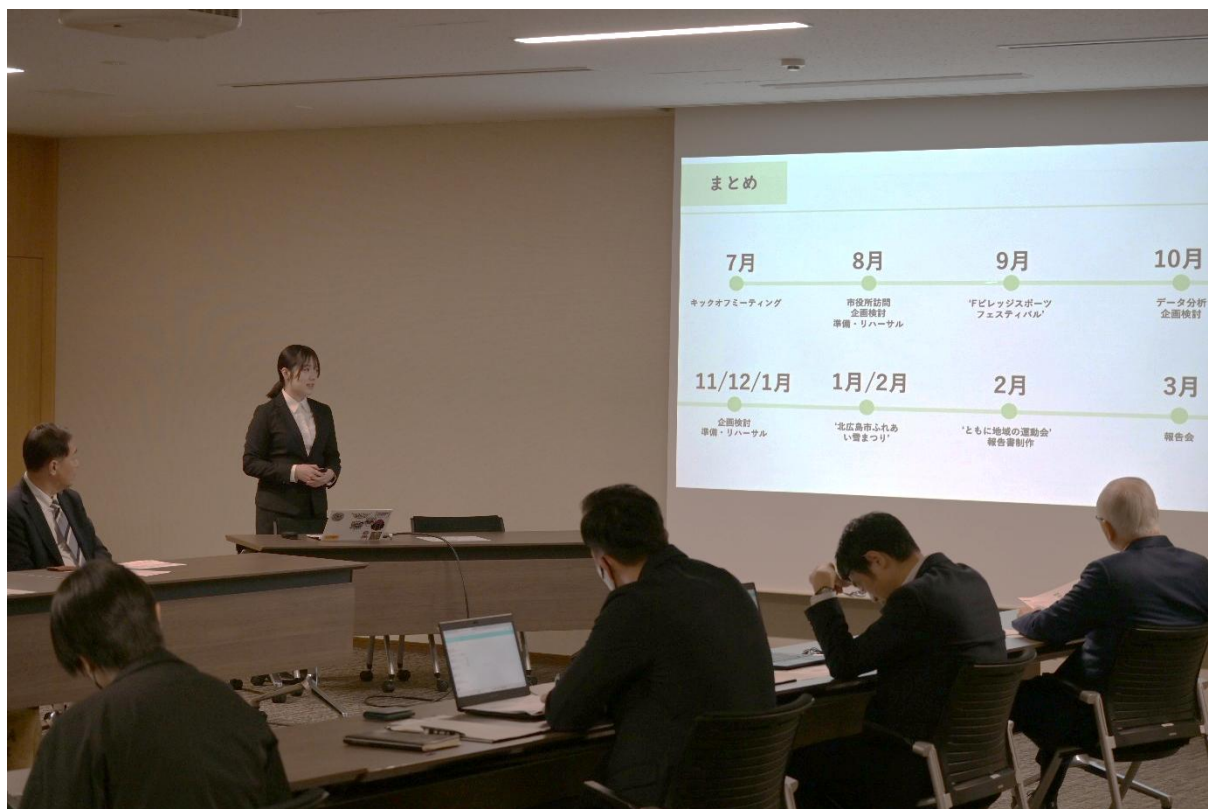
VI-3. 発展的な産学官民連携の枠組みとして確立していく可能性について

北広島 Project は、大学（学）、行政機関（官）、地域住民・地域団体（民）が協働して企画・運営を行っており、産学官民連携の基盤形成として一定の成果を示している。特に、行政による地域課題への支援、大学による人的・知的資源の提供、地域団体による運営協力、地域住民による主体的参加が相互補完的に機能している点に意義がある。

今後は、これらの連携に加え、民間企業（産）やスポーツ関連団体等との協働を進めることで、活動規模や内容のさらなる発展が期待される。

例えば、スポーツ用品企業による物品提供、地域企業による協賛、プロスポーツチームとの連携などを導入することで、地域活性化や健康増進事業としての社会的価値を高めることが可能である。また、本活動は単発イベントではなく、年間を通じた継続的な地域交流活動として実施されている点に特徴がある。この継続性は、地域住民との信頼関係形成や地域課題の把握につながり、より実践的な地域連携教育の基盤となる。さらに、学生にとっても、実社会における課題解決型学習（PBL）として機能しており、教育的意義も極めて大きいと考える。

以上より、北広島 Project は、地域交流・健康増進・人材育成を包括的に推進する実践モデルとして、発展的な産学官民連携の枠組みへと展開していく可能性を有していると考えられる。



図IV-1 北広島 Project 2025 北広島市役所での報告会の様子



図IV-2 北広島 Project 2025 北広島市役所での報告会記念撮影

VII. 今後の展望

これまでの北広島 Project を通じて、初年度から段階的に教員の介入頻度や干渉度合いを減少させてきた。初年度に比べると本 Project に継続して関わる学生（既存メンバー）が増加したこともあり、経年的に学生の主体性を活かしながら柔軟に運営が行われている。継続的な活動によって既存メンバーが増加し、年間活動の把握および経験値を有した企画、運営が展開できている。また、北広島 Project2025 では、既存メンバーが新規メンバーに対して、サポートする姿が自然発生的に確認された。一方で、年度毎に参加人数や活動規模の拡大に伴い、情報共有や意思決定に時間を要する場面も見られた。特に、学生メンバーの増加による日程調整の困難さや、企画内容の認識差、運営経験の個人差などは、今後の継続的な運営における課題として挙げられる。

そのため、今後の活動における教員の短期的な課題は、北広島 Project の組織体制の整備と役割分担の明確化のサポートである。

組織体制の整備においては、「リーダー」「副リーダー」など、北広島 Project 全体を統括する組織体制を整備し、年間の活動を統制する役割を既存メンバーから選出する必要がある。全体統括を軸に役割を明確に分担し、「企画」「運営」「広報」「物品管理」「記録・評価」など、それぞれに責任者を配置する体制づくりが必要である。また、学生の入替わりによってノウハウが失われることを防ぐため、企画書、運営マニュアル、リハーサル記録、振り返り資料等を体系的に蓄積・共有する仕組みを構築する必要がある。

さらに、今後の活動における展望として、教員の中・長期的な課題は、北広島 Project の持続可能な運営体制の構築や組織間連携としての体制整備をサポートしていく必要がある。

中・長期的な活動において、北広島 Project に参加意思を示す学生の人的資源だけでなく、予算や物品管理を含めた運営基盤の確保も課題となる。そのため、行政支援（官）や地域企業（産）との協働、外部資金の活用等も視野に入れながら、安定的な運営体制を構築していく必要がある。また、大学（学）、行政（官）、地域住民（民）、地域産業（産）との連携を継続する上では、連絡調整の窓口を明確化し、定期的な協議の場を設けることも重要である。組織体制の整備段階において、特定の個人関係に依存した運営ではなく、役割に明確な役割を持たせる仕組みづくりと組織間連携としての体制整備が重要である。

以上のことから、今後の展望としては、単発的なイベント運営から一歩進み、短期的には組織体制の整備と役割分担の明確化をサポートし、中・長期的には組織間連携、財政基盤整備を含めた「持続可能な地域連携組織」としての体制構築が重要な課題になると考えられる。そのなかで、学生間のノウハウ継承を途切らせない教員と学生の距離感を間違えないことも重要である。

引用参考文献

- 1) 中央教育審議会(2012)新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申).
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf, (参照日 2026 年 4 月 30 日).
- 2) 北海道日本ハムファイターズ HP (2025)
「F ビレッジ スポーツフェスティバル Supported by Natural Island」開催!
<https://www.fighters.co.jp/news/detail/202500732868.html>,
(参照日 2026 年 4 月 30 日).
- 3) きたひろ農学校 HP (2026) 第 38 回北広島ふれあい雪まつり.
<https://www.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/sightseeing/detail/00158088.html>,
(参照日 2026 年 4 月 30 日).
- 4) 北広島市 (2021) 北広島市総合計画 (第 6 次) 概要版.
- 5) <https://www.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/hotnews/files/00130300/00130322/gaiyoubann.pdf>, (参照日 2026 年 4 月 30 日).
- 6) 北広島市 (2023) 北広島市と札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部との包括的連携に関する協定書. <https://www.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/hotnews/files/00154500/00154500/20240819160445.pdf>, (参照日 2026 年 4 月 30 日).
- 7) 北広島市 (online) 北海道北広島市ボールパーク特設サイト.
<https://www.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/ballpark/>, (参照日 2026 年 4 月 30 日).
- 8) 溝上慎一 (2014) アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東信堂.
- 9) 文部科学省 HP (online) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申).
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm,
(参照日 2026 年 4 月 30 日).
- 10) 日本アクティブ・ラーニング学会 (2020) アクティブ・ラーニング研究 Vol.1 2020.
https://jals2030.net/wp-content/uploads/2020/03/active_learning_kenkyu_Vol.1.pdf,
(参照日 2026 年 4 月 30 日).
- 11) 日本アクティブ・ラーニング学会 (2022) アクティブ・ラーニング研究 Vol.2 2022.
https://jals2030.net/wp-content/uploads/active_learning_kenkyu_Vol.2_ver1.0.3.pdf,
(参照日 2026 年 4 月 30 日).
- 12) 札幌国際大学 HP (online) 地域・産学連携センター.
<https://www.siu.ac.jp/about/detail.html?content=160>, (参照日 2026 年 4 月 30 日).

- 13) スポーツ庁 HP (online) 第 2 期スポーツ基本計画 (平成 29 年度～令和 3 年度)
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413.htm,
(参照日 2026 年 4 月 30 日).
- 14) 横山克人・平澤芳明・安田純輝 (2024) 令和 5 年度札幌国際大学奨励研究費助成報告書：北広島市と札幌国際大学の連携を通じた学生主導による学びの展開及び地域振興の探索.
https://www.siu.ac.jp/assets/pdf/r5_yokohirayasu.pdf, (参照日 2026 年 4 月 30 日).
- 15) 横山克人・平澤芳明・安田純輝 (2025) 令和 6 年度札幌国際大学奨励研究費助成報告書：北広島市と札幌国際大学の連携を通じた学生主導による学びの展開及び地域振興の探索 第 2 報.
https://www.siu.ac.jp/assets/pdf/r6_yokoyama.pdf, (参照日 2026 年 4 月 30 日).